海岸道路

立原正秋

海岸道路

立原正秋

角川文庫 5170

昭和五十七年五月三十日　初版発行
昭和五十八年一月三十日　六版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話東京二六五—七一一一（大代表）
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——旭印刷　製本所——本間製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-129822-0946(0)

海岸道路

立原正秋

角川文庫 5170

海と風のうた

金曜日の午後三時、刈谷郁子は、リラホテルの一室で目をさました。郁子はベッドに上半身をおこすと、下着をさがした。下着は毛布の下の足もとの方にあった。郁子は下着をつけるとホテルの浴衣をひっかけ、窓のカーテンをあけた。

窓の外には、十一月の澄みきった湘南の空と、すぐ目の前に浮かんでいる江之島の向うに相模湾がひろがっていた。

暖房がきいている室内は温かかった。郁子はテーブルの上の水差しからコップに水を注いで飲むと、椅子にかけ、それから煙草をつけた。

「もう、いいかげんに目をさましなさいよ」

郁子はベッドを見て言った。部屋にはシングルベッドが二つおいてあったが、ひとつは毛布がきちんとしており、さっき郁子が脱けでたベッドに、保科道雄か海老のように軀をまげて睡っていた。

「目をさまさないなら、置いてきぼりにして行くわよ」

「静かにしろ。俺はいま天使の下半身の夢をみているんだ」

道雄がこっちに軀の向きをかえながら答えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「天使って、誰なの？」
「女はみんな天使だ。殊におまえさんは天使のなかでも上の部だろうな」
「あんなうまいことを言って。服を着るから向うをむいていなさいよ」
郁子は灰皿に煙草をもみ消すと立ちあがった。
「もういちどベッドに入れよ」
「だめよ。もう三時をすぎているじゃないの。あなただって家庭教師に出かけるんでしょうが」
「それはそうだな。頭の悪い子を見てやるのも楽ではないが。煙草をくれ」
それから二十分ほどして二人はホテルを出た。
ホテルの庭には郁子の車がおいてあった。車は一九三〇年代のベンツで、郁子はこれを刈谷家に輿入れするとき生家の倉から持ち出してきたが、新型車が氾濫している当世の道路で、博物館級のこの高級乗用車はしばしば故障し、交通麻痺をおこさせた。
戦後の鎌倉には、戦争で地位と名誉を失った名門というのがかなりあった。元子爵だった郁子の父が、娘を四十以上もとしのひらきがある新興成金の男に嫁がせたのは、傾きかけた家柄の保持のためだった。郁子は、自分より年上の息子がいる男の後妻に入ったのである。
刈谷悠蔵が、落魄した貴族の娘を二度目の妻に迎えたのには、さして意味があったわけではない。先妻が亡くなってから数年たった頃、友人から、こんな家の娘がいるがどうだね、とすすめられた。子供達はそれぞれ大きくなり、めいめい一戸をかまえていた。出戻りの郁子にそれほど

興味があるわけではなかったが、二人も女を囲っていることでもあり、では飾りものとして家においてみるか、ということで後妻に迎えた。つまり公式用に自宅においてみたのである。成金が金にまかせて珍しい品物を買ったのと同じであった。

そんなわけで、郁子ははじめから夫にあまりかまわれなかった。郁子が最初の婚家先から出戻ったのは、自分のわがままからであった。再婚当座、郁子は、娘時代からやっている乗馬にうちこんだ。夜は酒が時間をまぎらわせてくれた。しかしそれにも限度があり、半歳とは続かなかった。やがて郁子の前に現れた夫の末弟の息子である刈谷敬一（けいいち）の手引で男あさりをはじめたのである。男あさりをはじめてから乗馬は週一回となり、夜の酒は男と逢（あ）っているときだけとなった。刈谷敬一は、郁子のために狂言まわしの役割を果していたのである。

再婚してから最初の男が刈谷敬一だっただけに、郁子が彼と手を切るときはかなり苦労した。刈谷敬一は夫の悠蔵と同じく彼女の趣味にあわなかった。郁子は一計を案じ、毎度不感症になってみせた。

「きっとこれは乗馬のせいよ」

と郁子は言った。それから敬一はしばしば彫像を抱くような気持で美しい伯母（おば）を抱く破目におちいった。

「どうしたんだ、またか？」

ついに彼はある夜、腹をたてた。

「乗馬のせいではなく、ほかに原因があるのかもしれないわ。お医者さんに診てもらったけど、

当分治りそうもないと言われたわ」

敬一は彫像のような女のからだに軽蔑されたような気がし、汗を流して不感症治療法を試みたが、効果はあらわれなかった。そしてしまいに彼は腹をたて、もう乗馬はやめろ！　とさけんだ。そして二か月後に彼は郁子から別れて行った。不感症の女に用はないと見切をつけたのであった。

ちょうどその時分、郁子は保科道雄と知りあった。学校時代の同級生で生家の遠縁にあたる北沢勢津子の紹介であった。

郁子の運転する一九三〇年代のベンツはのろのろと山を降りて行った。リラホテルは高台にあり、海岸道路にでるには、いったん谷間におりて再ひ別の高台に出なければならない。

鎌倉を中心にして海岸道路は左右にのひていた。左は江之島、茅ケ崎を経て大磯、小田原に至り、右は逗子を経て葉山に至る道である。海岸道路にはいたるところにホテルが建っていた。これらのホテルは夏場は混むが、いくつかのホテルは季節はずれになるとひっそりとしてしまう。したがって予約なしに行っても、いつても泊れる。海岸道路ぞいに朝まで営業しているレストランが何軒かあり、深夜、東京からわざわざハーのホステスをつれてくる男達もいた。これらの男達は、ひとむかし前は、ホステスをつれて横浜の〝南京街〟にくりだした連中である。その頃ホステスは女給とよばれていた。

地元のある人達は、この海岸道路を有閑道路とよんでいた。よくも深夜これだけの人間があつまるものだ、と思うほど、どのレストランもまいばん満員だったのである。

ベンツはいったん谷間におりると、有料道路がある高台に出た。それから坂道を降りて片瀬にでた。

「鎌倉駅でおろせばいいの？」

と郁子が龍口寺の前を鎌倉の方向にハントルを切りながら訊いた。

「そういうことだろうな」

道雄はあくびをしながら答えた。

鎌倉と藤沢のあいだを走っている江之島電車は、江之島駅から腰越駅までは、東京の都電と同じく路面線路である。この時代おくれの電車は、発展して行く海岸道路とはまことに対蹠的であった。

ベンツは路面線路の道を出はずれ、海か見える海岸道路にでたとき、動かなくなってしまった。

「また故障か」

「すぐ直るわ」

郁子は外に出ると車の前をあけてエンジンの周りをいしっていたが、すぐ戻ってきた。

「直ったのか？」

「直ったわ。接続線がはずれていたのよ」

そして再びベンツは動きだした。

「こうした骨董品の車は俺の趣味にかなっているが、寒いのがやりきれん」

「がまんしなさい。わたしも去年、あんまり寒いので、車のなかに火鉢を持ちこんだわ。そう

したら、一酸化炭素中毒をおこしちゃって」
「それで死んだのか？」
「ばかねえ。死んでいたら、いまこうして運転しているわけがないじゃないの」
「生きかえったのか」
「そう。軽い中毒で済んだわ」
ベンツは鎌倉高校の前を通りすぎ、七里ケ浜の有料道路に入りかかった。そのとき、再びベンツは動かなくなった。
「あら、いやだ。エンジンがとまってしまったわ。あなた外にでてエンジンをかけてちょうだい」
郁子はエンジンをかける鉄の棒を道雄に渡して彼をせかした。
「こりゃ、たいへんな逢いびきだったな」
道雄はクランク棒を受けとると外に出て行った。彼は車の前部の穴にクランクをさしこみ、把手を回転させたが、エンジンはかからなかった。数度やったが駄目だった。
「だめだ」
「もう一度やってみてよ」
郁子は中からさけんだ。
道雄はもう数回クランクを回転させたが、やはりエンジンはかからなかった。
さいわい左端を走っていたので、後続車を遮断するまでには至らなかったが、有料道路といっ

ても道幅が狭かったので、大型の車が交叉すると、道がふさがってしまった。
「エンジンがこわれたらしい」
と道雄が言った。
「直してよ」
「俺にそんな時間があると思っているのか。直るまで、一時間はかかる」
道雄は窓から車のなかに顔をつっこんで煙草をとりながら言った。
そのとき、海と白い雲を背景に赤いスポーツ車が江之島の方から疾走してきたが、ベンツの横を通りすぎて二十メートルほど前で急停車すると、ドアが開いた。そして運転席から坊主頭に黒いサングラスをかけた男がこっちを振りかえり、乗れよ、とさけんだ。
「おや、生臭坊主か。いいところへ来てくれたな。では奥さん、あばよ」
道雄はスポーツ車の方に走って行った。運転しているのは浄土寺の弓削照道だった。道雄は、修理屋に連絡してよ、と郁子がさけんでいるのを尻目に、スポーツ車に乗りこんだ。

「誰だい、顔は見なかったが、美人かい？」
照道が訊いた。
「ああ、ちょっとふめるよ」
道雄は煙草を二本だしてくわえ火をつけると、一本を照道にやった。
「ところで保科、黒いストッキングをはいた女の子をやっつけたことがあるかい？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

照道が訊いた。
「ないね」
「そりゃ不幸だな。是非やっつけてみろ。しごくぐあいいいんだ」
「黒いストッキングをはいた女だけがいいという理由はないだろう」
「つまりさ、ストッキングをはかせたままやっつけるのさ。ストッキングだけはかせて立たせてみろ。あんな美的感動をよぶ女の姿は、そうざらにはないぜ」
「なるほど」
「それにな、肉色のストッキングなんて、もう時代おくれだな。黒いストッキング、それから紫色、赤いストッキングなんてのもいいな」
「おまえの発見かい」
「もちろん。俺はこれをフランス文学から学んだように思うが」
「で、いま、やっつけた帰りなのかい」
「昨夜、熱海でね」
「ばかやろう。黒いストッキングをはいている女の子といったら、十五、六の女学生じゃないか」
「おいおい、慌てるなよ。相手は踊り子だよ。いま辻堂でおろしてきたところだ。その子の家が辻堂でね。昨夜、浅草で、劇場かはねてから連れだしたら、なにしろ時間がおそかったもので、女は舞台で踊るときにはく股のつけ根までくる黒いストッキングをはいたまま出てきた。奇妙な

ことに、それがセックスアピールするんだな。車のなかで女がそれをとると言ったから、俺は千円やってとらせなかった。月末に鎌倉にくるから、そのとき試してみろよ」

「なるほど。生真坊主に相応しい発見だな」

「乗心地はどうだい？」

「しごくいいね。ついでに大塔宮まで送ってくれ。おまえとちがって俺はこれから稼がねばならんのだ。家庭教師に行く家までやってくれ」

「悪いがそうしちゃいられんのだ。今日は親父がいねえから、これから、一昨日お陀仏した奴の家にお経をあげに行かねばならん」

結局、保科道雄は、若宮大路の十字路で車からおろされた。彼はそこから鎌倉駅まで歩き、バスで大塔宮前まで行った。

保科道雄はすこし変った過去を背負っていた。彼は三雲俊子の庶子であったが、八歳のとき、保科隆太郎の嫡出に迎えられたのである。つまり、保科隆太郎は、現在の妻澄江をしかるべき家柄から迎える前に、三雲俊子に二人の子をうませたのであった。

ところが澄江は石女だった。後継者がいないと困る、と言いだしたのは、三雲俊子との結婚に反対した隆太郎の父であった。そこで保科一家は家族会議の結果、三雲俊子の二人の子のうち、上の子道雄を後継者に迎えよう、ということになった。もちろん澄江も承知の上であったし、八歳の少年は、生母と父の家のあいだを自由に行ききしてよい、とまで提案した。

澄江は、なにか珍しいものでもみるように俄に出来た息子を眺め、実の子のようにかわいがっ

た。そして道雄の弟の康雄もくれないかしら、ともう一人息子を欲しがったが、これは生母の三雲俊子が承知しなかった。

道雄が保科家にきてから七年目に、彼をかわいがってくれた祖父母が相ついで没した。彼等は生前、孫に満足していた。

三雲俊子は、成長する二人の息子を眺め、その一人が大きな屋敷の後継者になれるのを素直に喜んだが、道雄はまるでそんなことは考えていなかった。彼は、父から、将来なにをやってもよい、と言われていたが、大学は途中でやめ、以来、なにもしないですごしてきた。専攻は自然科学で、学校をやめた頃は、なにかするつもりでいたが、結局彼はなにもやらなかった。

彼はいま、鎌倉大町のアパートと小町の父の家と東京の目黒にある生母の家を自由に行ききしているが、弟の三雲康雄は、二年前に母親のもとを出て左翼劇団人民座に身を投じていた。

保科道雄は二時間近く中学生の英語と数学を見てやり、それから再びバスで駅前に戻ると、駅から歩いて先ぐの場所にある〈烏合の衆〉に足を向けた。〈烏合の衆〉はコーヒー店を兼ねたバーであった。

彼は駅前の広場を横切りながら、俺はいつまでこうして遊んでいるつもりだろう、と自分をふりかえっていた。彼は今年二十八歳であった。なにかやらなければいけない、と考えながら、目あてもなく街を歩きまわっているうちに、今年もまた冬になっていた。

〈烏合の衆〉に入ったら、そこに、従妹の北沢勢津子が来ていた。刈谷郁子を彼に紹介してくれた遊び好きな娘であった。

「景気はどうだね」
彼は勢津子の前に行って掛けると、彼女が飲んでいたジンのコップをとりあげ、ひとくちのんだ。
「あたし達、一昨日あったばかりじゃないの。たった二日間で景気が変るものですか」
「そうだったかね」
「あいかわらず郁子さんと仲よくしているらしいわね」
「そういうことらしいな」
「ここで郁子さんと待ちあわせ？」
「いや、あの奥方とはさっき別れたばかりだ」
「昼間から寝ていたの？」
「まあ、そんなところだ」
「ひとを馬鹿にしているわね。このあいだはあたしをすっぽかしたくせに」
道雄を見る勢津子の目がきつくなった。それはいくぶん嫉妬を含んだ目であった。

勢津子が従兄の保科道雄からすっぽかされたのは、二日前の夜だった。
その夜、二人は〈烏合の衆〉で看板まで飲み、どこかへめしを食いに行こう、と連れだって店をでた。出たところで別のバーからでてきた三人づれの仲間にあい、

「おい、麻雀をやらないか」
とさそわれた。
「麻雀、いいねえ。食いものがあるなら行くよ」
と道雄が答えた。
「くいものはあるけど、保科が入ったんじゃ、俺達、勝目はないぜ」
と三人づれの一人の高木が言った。
「ばか。俺はいま腹がへって麻雀どころじゃないんだ。くいものがあるなら、俺はそいつを食いながら麻雀をコーチしてやろう」
こうして勢津子と道雄はほかの連中といっしょに高木の家に行った。由比ケ浜の車道を笹目の方に入ったところに高木の家はあり、彼の父は証券会社の社長で、それに相応しい構えが大きく派手な屋敷であった。
高木の家に行ってすぐ麻雀がはじまったが、東、南、西、北、白牌のうち、白牌を勢津子がつかんでしまい、最初は彼女がメンバーからぬけることになった。そしてはじめの東南戦で、道雄は、一万八千点持の二万点返しで二万三千点勝った。千点二千円の賭麻雀であったから、四万六千円の勝ちであった。
「こんなコーチがあるかよ」
と高木が自分の敗け分二万円を払いながら不平を言った。
「嘆くやつがあるか」

道雄は紙幣を無造作に上衣のポケットにしまいこみながらわらっていた。
「月給の半分を持って行かれたじゃないか」
「どうせ親父の証券会社じゃないか。いくらでも前借りできるだろう。それより、食いものを持ってこい。俺はぬけるから、今度はうしろからみっちりコーチしてやろう」
道雄は他の二人から受けとった金もポケットに入れながら言った。
高木は部屋を出て行ったが、やがて盆にいろいろなものを載せて戻ってきた。
「なんだ、これは。パンにハタにハムか。アメリカ人じゃあるまいし、こんなまずいものが食えるか。俺はそとに行って食ってくるよ」
そして道雄は高木の家から出て行ったのである。勢津子は、なにか食べものを買ってきて、とこのとき道雄にたのんだ。しかし彼はそれっきり戻らなかった。
「四万六千円も勝ち逃げして、あの晩、あれからどこに行ったの?」
勢津子はグラスにジンをつぎたしながら訊いた。
「あれから鶴沼海岸の〈コケコッコウ〉に行き、メトックを一本空けながらサーロインを切っていたら、〈ロシナンテ〉によく来る医者がいるだろう。あの医者が〈ロシナンテ〉の女の子を三人連れて入ってきた。連中はそこに来る前にどこか一軒寄ってきたらしかった。医者の奴、ひどく酔っていてね、材木座の自宅に電話して、自家用車で迎えにこい、とさけんでいた。俺はてっきり奥さんが迎えに現れるのかと思っていたら、なんと、現れたのは高校生の男の子だったよ。無免許運転は危いわ、と女の子達が言ったら、なに、これは僕の教育方針だ、とかなんとか叫ん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton